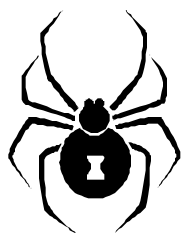


No. 19

2006 - 11 - 25

日本蜘蛛学会



トピックス

日本蜘蛛学会
創立 70 周年記念大会
(第 38 回大会)
に参加して

仲條 T. 竜太

甲子園の感動醒めやらぬ(はずの)東京国分寺にて,8月26日から27日にかけて学会創立70周年の記念となるクモ学会第38回大会が開催されました。初めてのクモ学会参加であった私は,これまで論文でしかお目にかかることのなかった諸先輩方とお会いできる機会を心待ちにしながら,大会当日を迎えました。

8月26日:いよいよ大会当日。埼玉在住である私は,事前に会場設営と計時の手伝いを頼まれていたにもかかわらず寝坊し(ごめんなさい),その上に駅から会場までもなかなかたどり着けず,講演開始時間にこそ間に合ったものの,何とも言えないスタートを切ったのでした。

初日は,恐らく新海栄一さんにクモ色に染められたらしい国分寺市長の挨拶に驚かされたり,

プロジェクターが突然消えて騒然となったりしながらも,学会自体は順調に進み,多くの興味深い講演をお聴きすることができました。

とりわけ伊深希さんと田中一裕さんのアンケート調査が注目を集めており,アンケートの対象にやや偏りを感じはしたものの,大変詳細な分析がされていました。それによると,虫嫌いになってしまった方の多くは中学生期に転機を迎えているそうです。そういえば中学校に進学したあたりから部活動やらテスト勉強やらのせいで放課後に外で遊ぶことが少なくなったっけ

なあ。

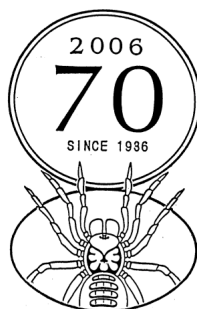
他にも,キクヅキコモリグモの幼体の体サイズ決定に影響を及ぼす要因を,それぞれの段階において詳細な実験により検証した飯田博之さんと藤崎憲治さんの発表や,ゴミグモの網引っ張り行動と採餌成功への影響を調査された中田兼介さんの発表など,大変刺激を受ける研究ばかりでした。特に中田さ

の発表ではゴミグモが網を引っ張っていることを写真で明快に示されていたことが印象的でした。

また,やや異なる視点での研究として,小野展嗣さんの桑鈴についての発表がありました。

日本蜘蛛学会 創立 70 周年記念大会

(第 38 回大会・総会)



ARACHNOLOGICAL SOCIETY
OF
JAPAN

桑鈴はどうも日本最古のクモの標本であるらしく、さらにはムツガイセキグモの卵囊ではないかとのことでした。クモの卵囊が長年にわたって大切に保存されていたとは驚きです。

絶滅危惧種についてのシンポジウムでは、宮下直さんが絶滅リスク評価についての丁寧な解説をされたことからこれまでの問題を察しつつ、八幡明彦さんや徳本洋さんの熱心な活動についての講演を聞き、評価にあたっての様々な問題点に対して、可能な限りの評価をしていこうという姿勢に非常に共感を覚えました。ただ、キシノウエタテグモが自然分布なのか人為分布なのかという議論では、どちらのケースもあるだろうし、どちらの主張もまだ証拠不足な感がありました。

8月27日：お酒の飲める身体に産んでくれた両親（の遺伝型）に感謝しつつも、昨日の懇親会で少々エタノールを摂取しすぎた感覚に襲われながら会場に向かいました。東京大会といえども、埼玉から国分寺は遠いです。

先日のシンポジウムの件もあり、八幡明彦さんが予定していたキシノウエタテグモについてではなくイソコモリグモ調査に関する説明に当てる場面もありました。八幡さんの熱意と行動力には到底敵いそうにありません。田辺力さんと曾田貞滋さんのババヤスデの配偶者認識にかかわる発表に続き、馬場 G. 友希さんのチリイソウロウグモに関する発表があったりしながら講演は順調に行われました。

2日目の講演は分類に関する発表が多いように感じましたが、その中でも井原庸さんと野嶋宏一さんのカチドキナミハグモ種群に関する研究は、サイズの違いにもとづく生殖隔離について扱われており、改めて種とは何かと考えさせられつつも、こりゃあ自分には同定できないわぁというのが正直な感想です。

谷川明男さんのキムラグモに関する発表は、「知ってしまった者の責任」という何とも重いフレーズに始まり、ミトコンドリアのCOI遺伝子による系統解析から、これまで多くの別種として扱われていた九州産のキムラグモが、実は同種である可能性が強く示唆された事などについての発表でした。1つの遺伝子座の解析からすべてを明らかにできるわけではありませんが、キムラグモの分類学的研究に一石を投じる興味深い報告でした。

全体を通して、いくつか意図のつかめない質問こそありましたが、それなりに活発な質疑応答が繰り返され、大変刺激を受けた学会でした。来年のクモ学会は熊本で開催されるそうですが、キムラグモの前で恥をかかぬよう、それなりに立派な発表ができることを目指して研究に精進しようかと思う次第です。

（東邦大院・理・地理生態）



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期行物の内容、採集会や講演会（総会・例会）の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがでしょうか。

三重クモ談話会（会長：橋本理市）

会報「しのびぐも」を年1回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

採集会は2007年2月17日（土）場所未定
参加希望者は1週間前までに事務局へ連絡を。
同定会は、2007年2月に予定

総会は、2007年4月に予定。詳細は後日連絡します。

しのびぐも 33号(2006.8.10発行)

新海 明：網の研究へと誘ってくれた人たち

橋本理市：不耕起栽培と水田の蜘蛛

橋本理市：三重県レッドデータブック 2005 に
おける蜘蛛類の記述

熊田憲一：三重県環境保全事業団調査で採集し
たクモ

三重クモ談話会：2005年度活動報告



しのびぐも 33号

入会申し込み

〒515-0087 三重県松阪市萌木町 7-4

貝發憲治 (事務局)

Tel (Fax) 0598 - 29 - 6427

会費 年 2000 円

和歌山クモの会 (会長：米田 宏)

会報「和歌山クモの会会報」を年 1 回発行。
総会・観察会を年 1 回実施。

和歌山クモの会会報 No.14 (2004.9.17 発行) 以降の発行はありません。内容は、遊絲 15 号を参照のこと。

入会申し込み

〒649-6264 和歌山市西浜 465-3

第 2 小杉マンション 1 - A

青木敏郎 (事務局)

Tel 090 - 1072 - 4414

会費 年 1000 円

東京蜘蛛談話会 (会長：新海栄一)

会報「KISHIDAIA」を年 2 回、「談話会通信」
を年 3 回発行。採集会年 4 回・合宿年 1 回・総
会例会などを年 2 回実施。

今年度の採集会は、東京都八王子市「片倉城
跡公園」で実施。

2007 年 2 月 18 日 (日)

JR 横浜線片倉駅改札口 午前 10 時 30 分集
合。または、公園入口 (管理事務所付近) に 10
時 40 分)

世話人 木村知之

例会は、

2006 年 11 月 26 日 (日) 午前 10 時から

東京環境工科専門学校 〒150-0011 渋谷区
東 2-5-3



東京蜘蛛談話会 2006 年 10 月の採集会
参加者集合写真

緊急の連絡先は、加藤輝代子 090 - 7012 - 6458 あるいは、初芝伸吾 090 - 6156 - 8378 まで

J R 渋谷駅東口(東急文化会館側)より、「学03 日赤医療センター行」バスにて5分、「國学院大学前」下車，徒歩1分，170円

KISHIDAIA 90号(2006.9.30発行)

西野真由子：ジョロウグモの産卵行動に及ぼす気温の影響

新海 明：イセキグモ類との遭遇

藤澤庸助：野鳥が雛に給餌したクモ類

新海 明：ワスレナグモに関する覚え書き

DRAGLINES

松本誠治：スズミグモ

伊藤 透・初芝伸吾：カトウツケオグモ山梨県にて確認

初芝伸吾：クサグモの出囊後の卵囊に潜っていたクモ類と昆虫類

初芝伸吾：コアシダカグモの捕食例

初芝伸吾：コオニグモモドキの捕食例

初芝伸吾：コオニグモモドキは落葉広葉樹林に，ヨツボシサラグモ類はスギ植林に多い？

新海 明：トゲゴミグモの占座姿勢と餌捕獲

工藤泰恵：シロカネグモの一種の脱皮例

初芝伸吾：神奈川県川崎市黒川でのアシナガカニグモの記録

谷川明男：屋久島にオオジョロウグモ定着か

初芝伸吾：イソコモリグモの捕食例

< 目録ドラッグラインズ >

馬場友希：八重山諸島(石垣島，西表島，与那国島)で採集したクモ

馬場友希：佐賀県で採集したクモ

馬場友希：対馬で採集したクモ

馬場友希：福岡県で採集したクモ

谷川明男：渡名喜島のクモ類採集記録

谷川明男：トカラ列島中之島のクモ類

池田博明：2005年度 東京蜘蛛談話会 観察

採集会伊勢原市・吾妻山のクモ

新海 明・谷川明男：東京蜘蛛談話会 2006年度合宿報告島根県大田市温泉津(ゆのつ)温泉周辺のクモ

入会申し込み

〒186-0002 国立市東 3-11-18-203

(有)エコシス 初芝伸吾 (事務局)

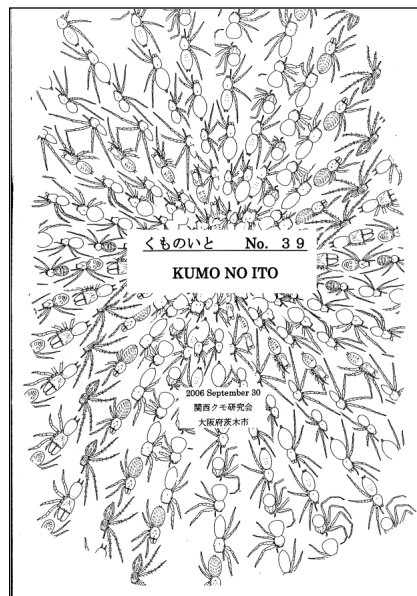
E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会費 年 3800円(学生 2000円)

関西クモ研究会(会長：山野忠清)

会報「くものいと」を年2回発行。採集会・研究会例会などを年数回実施。

例会は，2006年12月23日(土)に大阪市の四天王寺高校で実施。



くものいと 39号

くものいと 39号(2006.9.30発行)

研究報告

関根幹夫：溪流上に造網するオオシロカネグモ
の水面への落下を避ける行動

吉田 真：2種共存域におけるアシナガグモと
ヤサガタアシナガグモの造網場所選択
クモリスト

赤松史憲：採集散策日記～畝傍山(大学卒業研
究採集分)～

カトウツケオグモをゲット(文責：吉田 真)

池田勇介：奈良県吉野郡天川村洞川のクモ

吉田 真：佐賀合宿(2005年7月30日～8月
1日)で採集されたクモ

槻元とも子：大津市打出浜のクモ

加村隆英：宮城県におけるコアシダカグモの記
録

加村隆英：大阪府高槻市市街地のクモ2種

吉田 真：アシダカグモの出没する家

吉田 真：京都・嵐山のクモ

観察・採集報告

田中穂積：自宅の庭(大阪府富田林市藤沢台)
で、ヒゲナガツヤグモ発見

吉田 真：オスを襲うヒトエグモのメス

飯田博之：本当はみんな知りたい“クモ”のこ
と

池田勇介：セアカゴケグモに咬まれて

船曳和代：2ヶ月余り同じ場所で網を張り続け
たキジロオヒキグモ

加村隆英：新刊紹介

チャレンジ

黒田あき：『網の標本』に挑戦 - 失敗の巻(誰も
が通る?) -

船曳和代：「熱中時間～忙中“趣味”あり～」テ
レビ出演体験記

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 072 - 641 - 9550 (加村研)

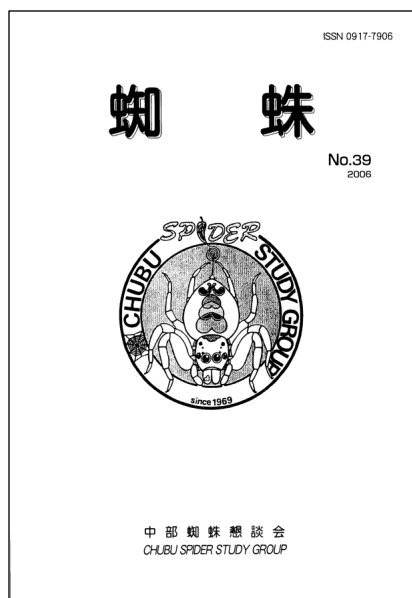
Fax 072 - 643 - 9432 (大学教務課)

会費 年 1000 円

中部蜘蛛懇談会(代表：緒方清人)

会報「蜘蛛」を年1回、「まどい」を年3回
発行。採集観察会を年2～4回、合宿を年1回、
総会・研究会を年1回実施。

総会・研究会は2007年2月11日に実施。



蜘蛛 39号

蜘蛛(KUMO)39号(2006.7.30発行)

吉田 哉：ヒメグモ科あれこれ

徳本 洋：白山国立公園産真正クモ類の高度別
分布

吉田 真：クモ飼育雑話

緒方清人：「写真日本クモ類大図鑑」と千国先生
の思い出

緒方清人：岡崎市自然体験の森のクモ類

益田和昌：愛知県春日井市の倍足類
益田和昌：岐阜県関市の倍足類
益田和昌：岐阜県揖斐郡揖斐川町の倍足類
益田和昌：三重県桑名市の倍足類
柴田良成：平和公園及び東山公園周辺の蜘蛛類
須賀瑛文：直島（香川県）で見たクモ類
福島彬人：秋田の冬のクモ
永井 均：初めて見たツユグモ
伴 満：蜘蛛のホームページを作って
大原満枝：蜘蛛と子どもたち

短報

益田和昌：東海地方の倍足類短報集（ ）
須賀瑛文：和歌山県白浜町にキシノウエトタテ
クモ

全般について

〒472-0022 知立市山屋敷町東山 10-6

緒方清人（代表）

Tel：0566 - 83 - 4474

E-mail：neon_kiyotoi@ybb.ne.jp

入会・会費など

〒451-0066 名古屋市西区兎玉 1-8-24

柴田良成（会計）

Tel 052 - 522 - 1920

会費

正会員 年 3000 円（高校生以下 1000 円）

準会員 「まどい」のみ 1000 円

関西クモゼミ

2006 年 12 月 17 日（日）に開催の予定。

連絡先 吉田 真

東京クモゼミ

毎月 1 回，第 1 日曜日に千葉県市川市の加藤
宅で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 新海 明 0426 - 79 - 3728

または，加藤輝代子 047 - 373 - 3344

言いたい！聞きたい！



イソコモリグモ減少率算定への アプローチ

徳本 洋

1. はじめに

私は近年，北陸地方の何県ではイソコモリグモは何年にくらべて何パーセントに減ったという数字を試験的に算出している。そのことはすでにいくつかの報文に書き，2006 年夏に行われた日本蜘蛛学会大会シンポジウムでもその要点をお話したが，調べるのに用いた方法をもっと具体的に，分りやすく書くようにという注文を頂いたので，それにお応えする形で本報を記させていただくことにした。

また私が調べたのは北陸地方の 3 県であるが，それ以外のいくつかの地方で来年以降にこのクモの生息状況を詳しく数量的に調査し，国内のもっと広範囲な地域にわたる減少率をおおまかでもよいから出してみよう，という計画も持ち上がっているのです，それに少しでも本報が役立つようにということも狙っている。なお，本報はシンポジウムで話した内容を引き継ぐ形になるので，できれば本稿の前段として大会講演要旨 (Acta Arachnol. 掲載) にも目を通していただくと話がわかりやすくなると思う。

2. レッドデータブックのカテゴリー要件

イソコモリグモの減少率という数量的データを私が求めてみたいと考えたきっかけは 1997

年におこなわれた環境省のレッドデータブックの改訂にある。これは国際自然保護連合 IUCN が 1994 年にそれまで使用してきたレッド種の定性的評価基準をやめて、減少率にもとづく客観的評価基準という定量的なものに換えたことを受けておこなわれた。しかしわが国では減少率について数量的データが得られていない、あるいは得ることが困難視されている生物種が多いため、定性的要件と定量的要件とを併記する形となっている。そこでまず、クモについてそのことを簡単に触れてみたい。

クモ形動物クモ目の動物で現在、環境省のレッドデータブックに載っている種は絶滅危惧類に 1 種（イツキメナシナミハグモ）、同類に 1 種群（キムラグモ類）と 4 種（ミズグモほか）、準絶滅危惧種に 5 種（キシノウエトタテグモほか）、情報不足種に 5 種（ヤマトウシオグモほか）である。本報でとりあげるイソコモリグモはその絶滅危惧類の中に入っている。

そこでその絶滅危惧類について、その選定要件をごくかいつまんで一部だけを記すと次のようである。

基本概念：絶滅の危険が増大している種。

定性的要件：大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。その他（略）。

定量的要件：最近 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があったと推定される。出現範囲が 20,000 平方キロメートル未満もしくは生息地面積が 2,000 平方キロメートル未満であり、出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。その他（略）。

なお、このような定量的基準は環境庁制定のレッド種に対してだけでなく、最近では各都道府県制定のレッド種でも取り入れている自治体

がある。

ところで、個体数算定が比較的やりやすい哺乳類や鳥類のような大型の動物と違って昆虫やクモのような小動物は小形で見つけにくい上に、一般に個体数調査がやりにくく、生息実数がとらえ難いというのが定量的要件を採用しにくくしている理由だと思われる。しかし、そうしているだけでは、レッド種問題への世の関心が高い今の時代の中では、逃げているような感じにもとられかねない。また、世の人にレッド種保護を強く訴えるには数値をあげて具体的な説明をする方がはるかに説得力がある。それでもし数量調査が可能な種があれば、減少率を数値で出してみたいし、それにクモではイソコモリグモならばできるのでないか、という私の経験上の思いがあった。

3. イソコモリグモの生息微環境、分布調査法

動物のある種の個体数調査をキロメートル単位ではかるような広範囲にわたって野外でおこなうには、まずその種が生息する環境を知り、その環境内での存否を捜査することから始めねばならない。しかもその場合、おおまかな環境が分っているだけでは調査効率が悪く、できるだけ絞り込んだ詳しい好適微環境まで分っていることが望ましい。イソコモリグモが砂浜海岸



図 1. 加賀海岸の砂丘

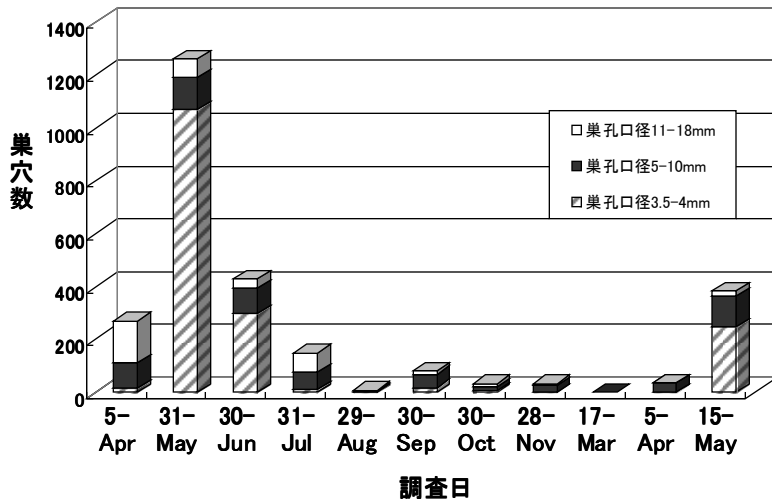


図 2 . 加賀海岸における巣穴数の季節的推移

に生息することは古くから知られている著名なことであるが、それがどんな砂浜であり、その砂浜のどこに生息しているか、いつ、どんな方法で調べるのが便利かまで分らないと所期の調査ができない。そこで私はまず本種が多数生息している砂浜で年間を通しての詳しい生息状況調査をおこなった。その詳細は略するが、その結果を図示する(図 1, 図 2)。図 1 は広範囲にわたって本種が高密度に生息している典型的砂丘である。ここで年間を通じて詳しい生息状況調査をおこなった。汀線から防砂林前面までの間に幅 10m の調査ベルトを 3 本設け、10m 平方の調査枠を連続的に設置して得たグラフが図 2 である。

このグラフから 5, 6 月には砂表にきわめて高密度に微小巣穴が作られることが分る。これは巣穴の中でのまどい(母グモ腹背上での密集)を終えて巣穴外に出てきた子グモが分散したことによる。また 8 月には巣穴がほとんど消失することが分る。これは夏季の昼間にはほとんどすべての個体が巣穴口を閉鎖するためである。この時季の昼間にまれに見つかる開口巣穴は放棄された巣穴であって中にクモがない。また

春秋は巣穴口を昼間でも開いている個体が多く、穴口から外を狙っている?クモの顔が見えることも少なくない。これらのことから、5~6 月は本種の微小巣穴を目当てにして探せば、生息密度がごく低い砂浜でも本種の生息を知りうる好適時期であることが分った。また、この方法で希薄生息密度の分布地を発見したこともある。それで、初めて訪れる調査地はすべてこの時期に調査をおこなうことにした。なお、グラフを見て分るように、子グモ分散期でもよく探せば中・大形巣穴も必ず混在している。このようにして砂浜の地形的微環境・植生環境と本種の生息範囲との間に図 3 のような関係があることを知った。すなわち安定した海浜植物帯がなければ本種個体群の維持ができないということである。そして多数のさまざまな砂浜を見て回った結果、次のことを知った。

安定した海浜植物帯のない砂浜に本種が生息していることはない。

安定した海浜植物帯のある砂浜には本種が生息していることが多いが、いないこともある。

なお、夜間調査は巣穴の外に出て餌動物の通過を待ち構えるという本種の特性を利用する方

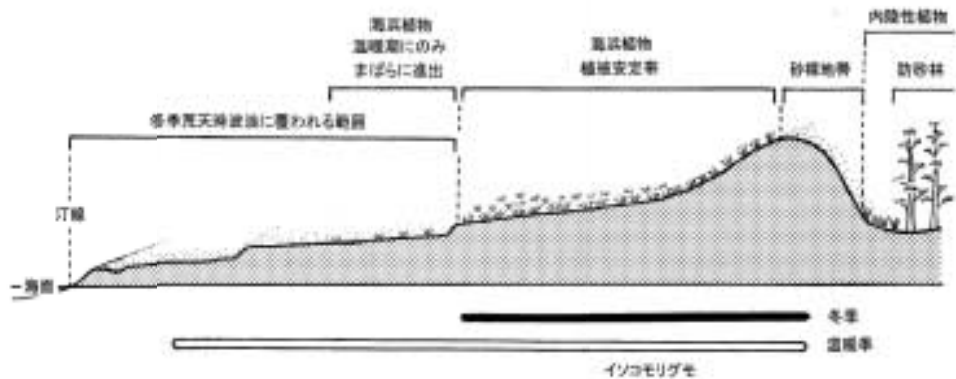


図 3 . 加賀海岸におけるイソコモリグモの分布模式図

法で、クモ個体を直接目撃でき、印象的である。この方法は狭い範囲内での存否調査にはきわめて有効であり、夏季でも探せるという利点があるが、広範囲分布調査には不適なので、ここでは触れない。

4. イソコモリグモ生息量の比較手法

(a) 手法の基本事項

海浜植物帯の有無を第一目標として本種の存否を探すと調査効率がよいということが分かったので、都道府県単位のような広範囲調査ではまず全海岸を巡検し、海浜植物帯が成立していない海岸を無生息海岸としてまず確定することができる。次は海浜植物帯が存在している浜での本種生息量の探索が問題である。ごく狭い範囲の地域での絶対的生息個体数の正確な生態学的推定法はいろいろあるであろうが、府県単位のような広範囲での生息量の地域的比較や特に当面の大目標である生息量の年代的比較には別の簡便で、実施の容易な方法が必要である。ましてや過去のある時代の生息量は実測不可能で、推定するしか方法がない。そしてその推定法で得た過去の生息量と、同じ推定法で得た現在の生息量を比較すれば絶対的生息量は不明でも、

両時代の相対的生息量から減少率を出すことができるはずである。この場合、もっとも結果を出しやすいのは生息海岸長の比較である。これは生息個体数の大小は無視して、生息する砂浜の汀線沿いの長さだけを集計する。次段階の方法は浜ごとに生息地面積と生息密度を調べ、その値から生息個体数を求めて集計するものである。いずれの方法も本種が海浜植物帯と密接な関係があることを利用するが、個々の浜について生息状況を厳密に調査するようなことはおこなわない。また前者の生息海岸長法は後者の生息個体数法の簡略化なので、後者の方法を以下に説明する。

・基準年：1950年。これは比較に用いる確実な植物分布情報が存在するほぼ遡上可能な上限年とされ、環境庁関係の諸調査でも使われている。この年は大戦終了後5年目で、そろそろ各地で本格的植生調査がおこなわれ出しており、その記録がかなり残っているし、その頃の海浜植生を知っている人がまだかなり多く現存している。また、1960年ごろからわが国が高度経済成長期に入り、自然環境破壊が急進し始めるが、それに入る10年前なので自然環境が戦前の状態をまだ維持していた年である。

表 1. 相対的クモ個体数の計算例

年	1950						
	地 名	海浜植物帯			基質	相対的 クモ密度	相対的 クモ個体数
長さkm		幅km	面積km ²				
	加賀海岸	3.5	0.08	0.28	砂	3	0.84
	尼御前-美川	19.3	0.00	0.00	礫	0	0.00
	美川-小川	5.5	0.00	0.00	礫	0	0.00
	小川-赤土	9.0	0.01	0.09	砂	2	0.18
	赤土-犀川	1.5	0.05	0.08	砂	3	0.24
	犀川-大野川	2.0	0.01	0.02	砂	1	0.02

・海浜植物の利用基準：海浜植物帯面積の大小が本種個体数の大小と比例するものとみなす。従って海浜植物帯があれば原則として生息密度は別として、必ず生息しているとみなすことになる。

そして具体的生息量の算定手法は次のようにおこなった。

- (1) 生息個体数は推定相対値を用いる。
- (2) [海浜植物帯面積] = [海岸線の長さ] × [平均海浜植物帯幅]
- (3) 生息密度を 0, 1, 2, 3 の 4 レベルに分け、この数字を相対的クモ密度の数値とみなす。
- (4) [相対的クモ生息個体数] = [相対的クモ密度] × [海浜植物帯面積]
- (5) [減少率] = [現在の相対的クモ個体数] / [1950 年の相対的クモ個体数]

なお、安定海浜植物帯の海側縁と内陸側縁は現地ですぐに見分けられるので、目測でその幅を読み取る。内陸側縁は本州ではチガヤ群落が発達していることが多く、その場合はそれと海浜植物帯の接触線を内縁とするとよい。このチガヤ群落の中にまでイソコモリグモが入り込むことはない。北海道ではハマニンニクという背

丈の高い密生形の草がよく茂っているが、これとイソコモリグモとの関係は未調査なので分らない。こうして海浜植物帯の幅が分れば、その幅が適用される浜の範囲を地図上に印し、その長さを地図で求める。

(b) 生息密度判定

相対的クモ生息密度として用いる生息密度レベルは次の判定基準によった。

- (1) レベル 0：まったく生息せず。
- (2) レベル 1：巣穴分布連続域の長さが 100 m 以下の小集団が砂浜汀線長 1km 内に 1 個ていどの巣穴分布密度。
- (3) レベル 2：巣穴分布は低密度だが、レベル 1 とレベル 3 の中間。
- (4) レベル 3：巣穴分布が高密度で分布連続域の長さが 1km 以上。

以上の方法で 1950 年の相対的クモ個体数を求めた石川県での例を表 1 に示した。現在の生息量も現地調査で海浜植物帯の長さと同幅を調査し、同じような表をつくれれば算出できるから、それによって現在生息量の 1950 年生息量に対する減少率を求めることができる。

なお、この生息密度レベルの決定においては

レベル 1～3 のレベル段階を現地ではどう見分けるかが本調査でのキーポイントになる。上記のように一応数値をあげて規定したが、実際には定性的に勘で決めるのが早い。まずレベル 3 とレベル 1 を基準として頭に置く。レベル 3 は図 1 のような海浜植物帯が海岸に並行して長く、かつ幅広く存在し、温暖期に本種の中、大の穴が比較的容易に発見しうる浜である。私の経験では現在このような浜は全国的にきわめてまれであろうと思う。レベル 1 は海浜植物帯が断片化されており、時間をかけて探しても巣穴の発見が難しいが、ないわけでもないというものである。この両極端以外は巣穴存在量の如何にかかわらず、思い切ってすべて 2 とするというように、簡略に割り切って処理する。

このような減少率算定法はあまりにも大雑把で信頼性が低いように思われるかもしれないが、砂浜という細長い環境では生息浜長が生息環境の大きさを決める最大因子となっており、生息個体数もそれに大きく支配される。従って海浜植物帯幅や生息レベルの影響は比較的小さく、その上、生息浜長の算出は比較的容易かつ信頼度が高いので、減少率のおおまかな大きさを見るのには本法の利用度はかなり高いのでないかと思う。

(c) 調査上の参考事項

過去の基準年ごろの浜植生状況については、まず、そのころの地理調査所発行地形図などを入手し、そのころの浜地形の概観を知ることから始める。そしてそれぞれの浜についてその後の浸食状況や海浜土木工事の実施状況、防砂林造成の歴史、過去の植生についての聞き取りなどの調査をおこない、それらを複合して本種の生息状況を推定する。こうした頭脳的復元には現在の砂浜についての調査経験の蓄積が大いに役立つし、その土地の海岸植生に詳しい人を見つ

けることも大切である。土木工事関係はその地域を管轄する府県庁土木部や国土交通省の出先工事事務所で調べると詳しい推移が分ること多かった。また、地域の海岸に関する地学的研究や土木工学的研究にもひじょうに役立つ報告が載っていることがある。

なお、岩石海岸域にはポケットビーチと呼ばれる小砂浜が点在するが、これも一概に無生息浜と断定することはできない。海浜植物帯がまったくない場合は別として、少しはそれが成立している場合、思いがけず生息していることもあるから現地視察は綿密におこなうことが必要である。しかし、このような場合、その浜の長さがごく短いのが一般的なので、府県単位の生息量比較には数値上ほとんど影響しないから、省エネルギー的には長い砂浜を重点的に調査し、岩石海岸地域は省略してもよいであろう。

また日本各地における戦後の砂浜汀線の陸側への浸食速度は、海岸近くに住まない方には想像困難なほどに大きく、ごく近年まで本種の生息が確認できたのに、現在はその浜はすっかり痩せて本種が消滅している例がいくつもある。従って現在はとても本種が生息できる砂浜でないからといって、過去もそこが無生息浜であったと速断してはいけない。戦後だけで数百メートルも後退してしまった浜は到所にある。従って古い知見をできるだけ幅広く集めることが大切である。

おわりに

種の減少率を求めるのに役立つ過去の生息量データが残っている小形の動物はほとんど存在しないであろう。このような場合は好適生息環境の減少率と、現在の好適環境での生息密度を詳しく知ることとを組み合わせることで減少率を推定するのがもっともやりやすい方法と思われる。

イソコモリグモはそれが実施しやすい種であった。私がおこなった方法にご批判をいただき、より優れた方法を提案していただければありがたい。八幡明彦さんはキシノウエトタゲモで好適環境の絞込みに独自の方法を開発して、このクモの保全への道を探ろうとしておられる。種ごとの生活史や生息環境の解明は保全活動に欠かせない。このような方面へ目を向ける方が増えるようお誘いする。

文 献

- 徳本 洋 2000a. 福井県におけるイソコモリグモの現状と過去 60 年間における分布推移. 福井虫報, 26: 1-10.
- 徳本 洋 2000b. イソコモリグモ調査のための砂浜地形学. くものいと, 28: 54-61.
- 徳本 洋 2004. 石川県におけるイソコモリグモ *Lycosa ishikariana* (Saito, 1934) の激減. のと海洋ふれあいセンター研究報告, 10: 21-30.
- 徳本 洋 2005. 石川県で見たイソコモリグモ *Lycosa ishikariana* (Saito, 1934) 生き残りの条件. Kishidaia, 87: 49-63.



「埼玉動物研通信 No.55」

今年5月末埼玉県立「川の博物館」学芸員の松本充夫氏から筆者のもとに「秩父市でカトウツケオグモらしきクモを採ったので同定してほしい」という内容の電子メールが届いた。添付された写真を見ると紛れもなくカトウツケオ

であった。クモを食べていたところを生きたまま採集し、餌のクモは標本にされたとのことだったので、餌のクモを送っていただいたところマミジロハエトリの成体であった。

カトウツケオについては最近餌捕獲に関する興味深い報告がなされた。即ち、1.ハエの一種がクモの近くに飛来すると、クモは第1脚と2脚を大きく広げ先だけを小刻みに震わせ、ハエはおびき寄せられるようにクモの前に近づき捕食される。2.クモの後ろから近づいた一匹のハエが、クモの腹部に止まりその突起を舐めるような行動を繰り返した(杉山・大原, 2003) というものである。そしてこの報告を見た新海(2004)は餌の誘引の可能性を示唆した。

興味を惹かれながらも滅多にお目にかかれないうクモなのでなかなか検証は難しいと感じ、いつしか忘却の彼方へと去りつつあったところへ松本氏の貴重な観察結果がもたらされた。今回の観察(カトウツケオがクモを捕食していた)は必ずしも餌の誘引説を否定するものではない。例えば餌となったマミジロハエトリがカトウツケオに誘引されたハエを追って近づき捕食された可能性も考えられるからである。そういえば前掲の杉山氏らの報告にカラスハエトリの一種(原文ではヒメカラスハエトリになっていたが



マミジロハエトリを捕食中のカトウツケオグモ

未記載種のため前記の表現とした)がカトウツケオに接近している写真が出ていたが、この時はクモが八工を摂食中で捕えられなかったようだ。

いずれにせよカトウツケオの餌誘引の有無についての答えは出ていない。上記文中で新海氏もご指摘の通り観察例を増やすしかなさそうだが、アルコール入り管瓶に漬ける前にまず観察をこれがなかなかできることではないのだが...そして観察の次は実験的に餌の誘引を検証する作業も不可欠だろう。個体数が少ないこともありまだまだ解明までの道のりは険しそうだが、プロとアマチュアが協力して少しずつ知見を積み上げていくしかない。

話が横道にそれてしまったが、松本氏のカトウツケオ採集時のデ・タが掲載されている、「埼玉動物研通信」については以前遊絲 No.13 でも紹介した。編集発行は当学会員である南部敏明氏。1冊 300 円、送料 110 円。照会先は下記まで。

最後に本稿をまとめるにあたり遊絲への紹介と写真の転載をご快諾下さった松本充夫氏に厚く御礼申し上げます。

「埼玉動物研通信」No.55」(埼玉県動物研究会発行。B5版。33頁。2006年9月10日発行。

〒369 1202 埼玉県大里郡寄居町桜沢2397 2 南部敏明氏宛

E mail : n-hachi@d7.dion.ne.jp

引用文献

杉山時雄・大原満枝 2003 カトウツケオグモの捕食行動の観察。蜘蛛, 36 : 749 - 751 .

新海明 2004 . カトウツケオは八工を誘引する?! . Kishidaia , 86 : 27 - 28 .

(平松 毅久)

テツガクするクモ

作・あきもとのぼる

絵・あきもとふみこ

ISBN 4-289-00880-1

新風舎刊 1400 円

「おかあさんは、ぼくたちを守るために、ススキの葉っぱをじょうずに折りたたんで、おしりから出す糸で固め、おにぎりみたいな形の部屋を作って産室にしたんだって」。

そう、この本の主人公「テツガク」するクモはカバキコマチグモの赤ちゃん。「ぼくも早く大きくなって、おかあさんみたいな大人になりたいなあ」と考えていたら、どこからともなく「そんなに早く大きくなって、本当にいいのかい」と「不思議な言葉」が聞こえてきたのだった。

ススキのおにぎりの部屋は、鳥やハチの攻撃に何度もさらされるが、いつもおかあさんがいのちがけで守ってくれた。でも、一方でクモの赤ちゃんは、この産室の外がどうなっているのかも知りたいし、産室をゆらしにくる「鳥」や「ハチ」がどんなものかも知りたかったのだ。それから、どうやって生まれてきたのか、「生き



る」とか「死ぬ」ことや「いのち」が何なのかも知りたかった。するとまた、不思議な「夢のような声」がゆっくりと鳴り響いた！それが『テツガク』の始まりだよ。あとは一人で考えることさ。

やがて、クモの赤ちゃんはからだじゅうがむずむずしてくるのを感じはじめた。「脱皮」の始まりだ。やっとの思いで、脱皮を終えた赤ちゃんは、急にお腹がすいてきたのだった。まわりをみまわすと、みんなお腹がすいているらしく、「何か」を夢中で食べはじめている！。「さあ、ぼくも食べなくっちゃ」「とてもおいしいし、なにか脱皮のあとに力がつくような、そんな味がした」。「おかあさんもいっしょに食べようよ」「おかしいなあ、おかあさん、おかあさん、どこへ行っちゃったの」。おかあさんの行方を心配しながらも、クモの赤ちゃんはおいしいごちそうを夢中になって食べ続けた。すると、「もうすぐ、お別れだね。みんな元気に暮らすんだよ」とおかあさんの弱々しい声が聞こえてきた。どうしてもうすぐお別れだなんて言うのだろう。そのとき赤ちゃんは「不思議な言葉」を突然思い出したのだ。・・・「そんなに早く大きくなっていいのかい」。

「そのときぼくの目の前で何かが少し動いた。さっきまでみんなのまんまるのおなかのせいで見えなかった足元の先が、少し見えるようになったんだ」。「すると、なんだかとってもやせ細ったおかあさんがそこにいた」。「空気のぬけたボールみたいに、ぺしゃんこになって、おかあさんはやっと思をしていた」。

「なんてとんでもないことをしてしまったんだろう。ぼくたちのごちそうがあかあさんだったなんて。そんなことちっとも知らなかったよ」。するとまた不思議な声をした。「いのちは、だれかのいのちで生かされている」。「そうか、おか

あさんは、その大切なことをぼくたちに教えてくれたんだ」。カバキの赤ちゃんはいのちの不思議さと大切さに気がついたのだった。

そして、「ぼくはいろんなことにおどろいて、いろんなことに疑問をもって、いろんなことに感動して、本当のことに気づいてやるぞ」と決心した。やがて、おしりから流した糸の風船につかまり、まぶしい光に満ちた世界へと旅立っていくのだった。

作者のあきもとのぼる（秋元 昇）氏は本会の会員。挿入画を描かれたあきもとふみこ氏はお姉さまのこと。談話会の採集会などで直接お会いした方もいるかも知れない。

実は、私はこの本が送られお手紙を拝見するまで、秋元さんの来歴や現在の活動に関して何も存じあげなかった。もっとも、会員の大半は同じ状況に相違ない。この本を読みカバキコマチグモの奇抜な子育ての習性を巧みに取り込み、児童書として編み上げた創作力に感心してしまった。

東京蜘蛛談話会の会員にはさまざまなジャンルの方がいる。クモの採集や観察家を中心だが、クモを素材として美術や音楽などの創作活動をする著名な方もいらっしゃるし、マンガ作家として有名な方もいる。クモグッズの収集家もかなり多い。なかにはそんな会員を見ることを趣味にする方もいるかも知れない。もちろん、私は談話会からクモの研究者がさらに輩出することを第一に願っていることは言うまでもない。しかし、時として色々なジャンルの融合はとてつもない「クモ楽」反応をひきおこす可能性もあるとも考えている。そのような反応のひとつを「テツガクするクモ」の中に見た思いがするのだ。

なお、谷戸の自然保護を取り扱った「トリノフンダマシの夏」も収録。ここには、谷戸で自

然保護活動をする斎藤慎一郎さんが登場していた。ぜひ、ご一読を。

(新海 明)

県別クモ類分布図を バージョンアップしました

県別クモ類分布図を Ver.2004 から Ver.2006 にバージョンアップしました。主な変更点は次のとおりです。1. Ver.2004 の分布データに 141 文献 8233 件のデータを追加し、データ件数は 48573 件になりました。2. 分布図の収録種数は、38 種増加して 1382 種になりました。3. 新たに 736 種 1529 枚の写真を追加しました。4. 県別種名一覧の表示を目録形式に変更しました。5. 新たに県別文献一覧の表示を追加しました。価格は前バージョンと同じく 1 枚 8140 円 (送料とも) です。なお、Mac では、OSX 以降が必要です。ご購入くださるかたは私までご連絡ください。〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学農学部生物多様性 谷川明男 あるいは E-mail で

dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp まで。

(谷川明男)



採集情報

日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。

タイリクウズグモ

和歌山県田辺市秋津町 2006 年 10 月 13 日

2 後藤岳志採集 谷川明男同定 (和歌山県新)

カラコモリグモ

茨城県つくば市八幡台 2006 年 6 月 27 日

4 6 月 13 日 1 山下英恵採集 谷川明男同定 (茨城県新)

ワキグロサツマノミダマシ

沖縄県石垣島於茂登岳 2004 年 9 月 22 日

1 馬場 G. 友希 (石垣島新)

ミツカドゴミグモ

沖縄県石垣島パンナ公園 2004 年 9 月 22 日

1 馬場 G. 友希 (石垣島新)

ヨシダサヤヒメグモ

沖縄県石垣島名蔵 2006 年 9 月 21 日 1

馬場 G. 友希 (石垣島新)

タニカワヤリグモ

沖縄県石垣島於茂登岳 2006 年 9 月 19 日

1 馬場 G. 友希 (石垣島新)

ナナホシヒメグモ

沖縄県石垣島名蔵 2006 年 9 月 21 日 1

馬場 G. 友希 (石垣島新)

タニカワアシナガグモ

沖縄県石垣島於茂登岳 2006 年 9 月 19 日

1 馬場 G. 友希 (石垣島新)

ミナミコガネグモダマシ

沖縄県石垣島名蔵 2006年9月21日 1
 1 馬場 G.友希(石垣島新)
 ワクトツキジグモ
 大阪府茨木市竜王山 2006年6月21日 1
 幼体 大西敏一採集 杉山時雄・緒方清人・谷川明男同定(本州新)
 ツツゲホウグモ
 東京都八王子市裏高尾町 2006年7月2日
 1 高木 B.俊採集 馬場 G.友希・谷川明男同定(東京都新)
 ホンクロボシカニグモ
 東京都八王子市高尾山 2006年9月10日
 1 高木 B.俊採集 谷川明男同定(東京都新)
 クメジマウズグモ
 沖縄県渡名喜島 2006年6月17日 多数
 谷川明男(渡名喜島新)
 トガリヒメグモ
 鹿児島県奄美大島龍郷町 2006年6月5日
 1 馬場 G.友希(奄美大島新)
 シロオビトリノフンダマシ
 鹿児島県加計呂間島 2006年6月21日 1
 巨 D.悠哉採集 馬場 G.友希同定(加計呂間島新)



カラコモリグモ

キクメハシリグモ
 千葉県君津市折木沢 2005年7月17日 幼体多数, 2006年4月8日, 25日 幼体多数,
 2006年4月30日 1 谷川明男(千葉県新)
 千葉県君津市怒田 2006年7月13日 2y
 五味真人・仲條竜太
 東京都八王子市片倉城址公園 2006年7月10日 2y 八幡明彦(東京都新) 環境:ヨシ・ガマ池を囲う石組みから生えた植物の周辺.
 大分県中津市耶馬溪町宮園雲八幡宮 2006年7月31日 1 2y 八幡明彦(大分県新) 環境: 山間の水田地帯にある神社前,水路を囲む石垣に生えた植物下.
 東京都あきる野市切欠の秋川河川敷の草地 2006年9月9日 1ex.(成体と思われる)
 新井浩司発見 写真によって谷川明男同定
 ワスレナグモ
 埼玉県入間郡毛呂山町下川原 797-60 2001年11月3日 本橋美鈴採集 八幡明彦同定
 環境:城西大学に隣接する住宅地の庭,ブロックをどけたところでクモを発見.
 島根県出雲市出雲大社 2006年7月23日 1y(巣穴は9個以上確認) 八幡明彦 環境:境内外縁のツツジ植込み・竹林に接する芝生面と歩道フェンス下など,歩道のある車道すぐ横の乾燥した場所.
 福岡県朝倉市甘木公園 2006年8月1日 1y(6個以上の巣穴を確認)八幡明彦 環境:神社の参道につづく民家生垣横の石段わき.短くシバが生えた乾燥した地面.(福岡県新)
 ヒメクサグモ
 埼玉県熊谷市大麻生 2006年10月16日
 1 馬場 G.友希(埼玉県新)
 スズミグモ
 神奈川県海老名市国分寺台 2006年7月14日 1y 土屋昌利

オオジョロウグモ

鹿児島県南種子町宝満の池 2005年8月20日 1ex.(成体と思われる)中島 淳目撃(種子島新)

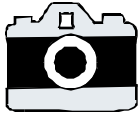
沖縄県竹富島 1997年1月2日 1ex.(成体と思われる)西野佳秀・西野真由子目撃(竹富島新)

シロホシヒメグモ

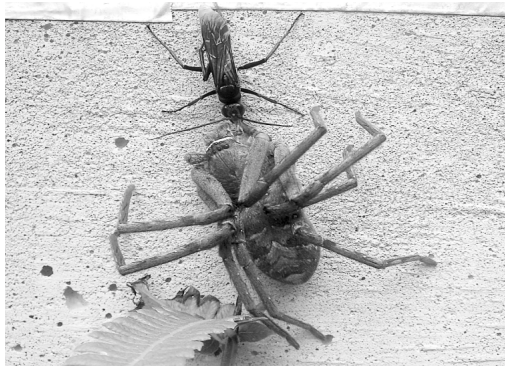
千葉県船橋市三山東邦大学構内 2006年7月20日 1 植松いのり 2006年10月30日 1 仲條竜太(千葉県新)

サトヒメグモ

徳島県徳島市眉山山麓 2006年11月16日 1 馬場 G.友希(徳島県新)
(新海 明・谷川明男集約)



ギャラリー



『よっこらしょっと』

アシダカグモを捕らえて運んでいるツマアカベッコウバチ. 自分の体重よりもはるかに重いこの獲物を運ぶその力はどこから湧き出てくるのでしょうか. しかも, 垂直な壁を登っています.

(鹿児島県奄美大島にて巨 D.悠哉撮影.)

コメント: 谷川明男)

遊絲 17, 18 号会計報告 (2005.9~2006.8)

収入	
寄付	73940 円
学会補助	5060 円
繰越金	17800 円
合計	96800 円

支出	
遊絲 17 号送料	19760 円
遊絲 18 号送料	19680 円
紙/封筒/プリンタートナー	30188 円
小計	69628 円
次号繰越金	27172 円
合計	96800 円

遊絲への寄付のお願い

遊絲の発行は, 学会財政難のため, 会員の皆様からのご寄付で賄っております. ご寄付いただいた方には, カレンダーあるいは絵葉書(5枚1セット)を差し上げております. 形としては, 1枚あるいは1セットにつき 1000 円でご購入いただいております. カレンダーは顔料インクのインクジェットプリンターで A3 用紙にプリントしてあり, 絵葉書も同じ印刷方法ではがきサイズに印刷してあります. ご寄付いただける方は谷川明男までカレンダー, 絵葉書の別



カレンダー (9 月から 8 月までです)



絵葉書（実際には5枚組です）

と枚数、セット数をお知らせ下さい。郵便では、〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学農学部生物多様性研究室 谷川明男、E-mailでは、dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp までご連絡ください。折り返し発送の上、振込先をご連絡させていただきます。

編集後記

一昨年の秋に関東地方でジョロウグモが激減したことを報告したことがあった（遊絲15号）。あれから2年、「今年はジョロウがすごく多い」という情報を複数の方からいただいた。30年以上調査を続けている房総丘陵の清澄山ではどうかと、私自身も期待していたのだが9月から10月にかけて風邪をこじらせてしまい調査もままならなくなってしまった。今年は断念も止むなしかと覚悟していたところ、谷川さんから「私が代わりにやりましょう」という申し出があった。そして、忙しい中を馬場 G.友希さんと2人で調査をして下さったのだ。感謝、感謝。恐縮の極みである。

その結果は100mあたりの密度が26.4頭と2年前の0.25頭と比較して100倍にも急増していた。「今年は多いのでは」という印

象は（房総丘陵では）正しかったようだ。日本各地でのジョロウの様子はどんなだったのであろうか。

遊絲がこのような情報の集う場になることを期待しているのだが。

（新海 明）

遊絲原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mailでは dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp（谷川明男）まで

発行は、年2回（5月、11月）の予定。締切は発行月の前月末日です。

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

〒520-0062 大津市大谷町 6 D-6

榎元敏也

E-mail: tmasumo@pop21.odn.ne.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203

（有）エコシス 初芝信吾

E-mail: hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

Tel 042-501-2651

年会費 正会員 7000円（学生は5000円）

郵便振替口座 00970-3-46745

遊絲 第19号

2006年11月25日発行

編集者 新海 明、谷川明男、池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 鶴崎展巨